

Title	柏木義円のみた福沢諭吉と『時事新報』
Sub Title	Kashiwagi, Gien's view on Fukuzawa, Yukichi and Jiji shimpo
Author	山梨, 淳(Yamanashi, Atsushi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.), p.235- 277
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

柏木義円のみた福沢諭吉と『時事新報』

山 梨 淳

はじめに

本論は、組合教会（現日本基督教団）の牧師、柏木義円（ぎえん一八六〇—一九三八）の福沢諭吉及び『時事新報』観を明らかにすることを目的としている。柏木義円は、草創期の同志社で学び、新島襄の感化のもとに洗礼を受けて、後、群馬県の安中教会あんちゅうで牧師を務めた人物である。

柏木は『上毛教界月報』を一八九八年に創刊して一九三六年まで約三八年間発行しているが、この教会紙のなかで福沢に度々言及している。⁽¹⁾ また柏木は、折に触れて『時事新報』の記事に触れ、同紙の言論活動に関心を示していた人物である。

柏木義円に関する研究は、戦後、武田清子の「柏木義円の臣民教育批判」(『思想』一九五四年一二月、五年一月)に始まっている。⁽³⁾その後、伊谷隆一の編集になる『柏木義円集』が柏木の主要記事を収録し、⁽⁴⁾『上毛教界月報』の復刻版が刊行され、研究環境が整えられてきた。近年では片野真佐子が柏木の伝記を執筆し、⁽⁵⁾氏の翻刻によって柏木の日記や書簡集が刊行されている。⁽⁶⁾

柏木関連の研究では、柏木の福沢への関心は夙に指摘されており、片野真佐子は柏木が「往々にして福沢論吉と比較して新島を語る」と書いている。⁽⁷⁾また片野は、柏木が政府の教育政策に対する批判において、『福翁自伝』の幼少期の逸話を用いていることに触れている。⁽⁸⁾ただ、関連研究では、柏木の福沢への評価はあくまで彼の師新島への評価に劣る二次的なものとされ、柏木の福沢への持続的関心が看過されてきたように思われる。

福沢研究の分野では、福沢観の研究が様々に行われてきた。戦後では、伊藤正雄が『福翁自伝』の受容に関する論考⁽⁹⁾を発表し、福沢の同時代人の福沢論を収録した著作⁽¹⁰⁾を刊行している。福沢論吉協会の機関誌『福沢手帖』は、知識人の福沢観に関する様々な論考を掲載している。⁽¹¹⁾近年では小川原正道が福沢在世期から一九八〇年代までの福沢観を通観した著作を刊行している。⁽¹²⁾ただ福沢研究では今まで柏木の福沢観が取り上げられる機会はなかった。その理由としては、『月報』が地方のキリスト教機関紙であったため、柏木の存在が認知されてこなかったことが考えられる。

以上の研究状況を踏まえ、本論では『月報』と後継紙『新生命』の記事を取り上げて、柏木の福沢論吉・『時事新報』観を明らかにすることを試みる。

第一節では、柏木義円の生涯と『月報』を概観する。

第二節では、『月報』における福沢論吉観を検討する。初期には福沢批判も行われていたが、日露戦後には福沢がしばしば新島襄と並んで評価されたこと、柏木が新島をより高く評価しながらも、福沢と新島に共通するものを重視していたことを明らかにする。

第三節では、福沢の著作『学問のすゝめ』と『福翁自伝』の文章が『月報』でどのように用いられていたのかを考察する。

第四節では、『月報』での『時事新報』記事の評価を取り上げる。御真影問題や乃木將軍の自刃などの評価において、柏木が当時の『時事新報』主筆石河幹明と考えを同じくしていたことを確認する。

第五節では、一九一五年一月の新島襄贈位及び福沢の贈位回避に対する柏木の反応を取り上げる。贈位に批判的な柏木の考えは福沢や石河と共通しており、新島の贈位を望んだ徳富蘇峰と対極的なものであったことを明らかにする。

第六節では、『月報』廃刊後の柏木の言論を取り上げる。晩年の柏木が『新生命』で福沢の名を挙げつつ時流に抵抗していたことを確認する。

柏木は地方教会の牧師として司牧に献身するかたわら、時局批判の言論を繰り広げていたが、福沢の著作や同時代の『時事新報』の言論活動は、日本社会のデモクラシー化を願う彼の心の支えとなっていた。柏木の福沢観は、近代日本のキリスト者による福沢受容の一事例として検討に値するものと考ええる。

一 柏木義円と『上毛教界月報』

(1) 柏木義円の生涯

柏木義円は、一八六〇（万延元）年三月九日、越後国三島郡与板（現新潟県長岡市）で、浄土真宗大谷派西光寺の住職徳円と妻ヨウの長男に生まれた（以下、柏木の伝記情報は片野真佐子の著作に拠る）。父親は柏木の生後間もなく亡くなり、寺を継いだ義兄も早世したため、柏木が六七年に家督を相続し、翌年に得度している⁽¹³⁾。

一五歳の時（一八七四年）、柏木は星野恒の私塾広業館に入門し、この時期、福沢の『西洋事情』を学んでいる⁽¹⁴⁾。一八七五年に星野の塾が解散すると、新潟師範学校に入学したが、翌年同校が東京師範学校に統合されるに伴い、東京師範学校に転入した。同校校長の秋山恒太郎⁽¹⁵⁾は慶應義塾出身者であり、柏木は福沢の「孫弟子」⁽¹⁶⁾とも言えることができる。

一八七七年に東京師範学校を卒業した柏木は、群馬県の土塩小学校や細野西小学校の校長を務めた。この時期、彼は同僚の影響でキリスト教に関心を抱き、海老名弾正が牧師を務める安中教会に通うようになった。八〇年、彼は友人の紹介により同志社英学校に入学している。柏木は学資不足により同志社を約一年で退学しているが、この一度目の同志社在学中、彼は交詢社会員が京都で行った反キリスト教演説会に立ち会っている⁽¹⁷⁾。

同志社中退後、郷里に戻った柏木は、一八八二年細野東小学校校長となった。彼は、八四年一月に海老名弾正から洗礼を受け、同志社英学校に再入学を果たしている。この年の六月、福沢は『時事新報』に「宗教も亦

西洋風に従はざるを得ず」を発表した。従来キリスト教に批判的な福沢がキリスト教容認の必要性を訴えたため、この社説は反響を呼び、新島襄ら同志社関係者も驚きの反応を示している。⁽¹⁹⁾ 柏木にも強い印象を与えたようで、『月報』でこの社説に度々触れている。⁽²⁰⁾

一八八七年、柏木は徳富蘆花らと『同志社文学雑誌』を創刊し、この時期から文筆活動に関わるようになった。九二年、井上哲次郎のキリスト教批判が機縁となった教育宗教衝突論争では、キリスト教側の論客として活躍している。

同志社を一八八九年に卒業後、柏木は同志社予備校主任に就任した。九〇年に熊本英学校の校長代理として派遣されたが、九二年に奥村禎次郎「不敬事件」により辞任し、同志社予備校に復帰している。この頃、彼は平野茅子と結婚し、彼女との間に六男二女を儲けている。

一八九七年、同志社当局と同校を支援してきたアメリカン・ボード（米国海外伝道協会）との間で緊張が高まり、小崎弘道が同志社社長を辞職すると、柏木も同年五月に同志社を辞職している。柏木は、湯浅治郎⁽²¹⁾の推挙を得て、同年八月に群馬県の安中教会の仮牧師（一九〇二年五月に正牧師に就任）となった。以後、彼は群馬での地域伝道に生涯を捧げることになる。

柏木は一八九八年一月に『上毛教界月報』を創刊し、同紙上で日露戦争から満州事変、二・二六事件に至る社会情勢へ批判の健筆を振るった。『月報』は忌憚のない社会批判により、しばしば発禁処分を被り、一九三六年一二月には廃刊を余儀なくされる。後継紙『新生命』は柏木の編集から離れ、彼は寄稿者として同紙に関わった。

柏木は一九三七年秋から体調を崩し、翌三八年一月八日に七九歳で亡くなった。

(2) 『上毛教界月報』

(i) 群馬県の教会報 『上毛教界月報』

『上毛教界月報』は一八九八年一月に創刊され、一九三六年十二月に廃刊されるまで全四五九号が柏木を編集人として発行されている。当初はタブロイド判四頁で、二一号からB5判一二頁（後一四頁）で刊行されている。発行部数は平均六〇〇部であったが、特別号などでは一〇〇〇部を超えていた。半数近くは柏木の負担で刊行され、群馬の諸教会や各所に送付されている。『月報』は上毛地方の諸教会（安中、原市、前橋）の連合的機関紙であり、巻末の教報論では教会の活動や信徒の消息が伝えられた。

『月報』には柏木の説教や論説がしばしば掲載されている。また同紙の雑報欄に柏木は無署名で時勢への批判や感想を書き連ねていた。同時代の知識人界ではほぼ無名であったが、彼の見識は吉野作造も認めるところだった。⁽²²⁾

(ii) 『月報』の参考紙誌

柏木は『月報』の編集にあたって、各種の定期刊行物を活用している。教会関係の定期刊行物では、組合教会の『基督教世界』をはじめ、『福音新報』、『新人』、『聖書之研究』など様々な教会紙や雑誌が参照されている。

また柏木は社会情勢の把握のため、様々な一般紙誌を情報収集に用いている。初期の『月報』では内村鑑三が記者を務めた『万朝報』の参照が目立っている。非戦論を唱えた社会主義者の幸徳秋水や堺利彦は、『万朝

報』を退社し、『平民新聞』を創刊したが、柏木はこの『平民新聞』を愛読し、読者にも推奨している。⁽²³⁾

『月報』に『時事新報』の記事が取り上げられたのは、福沢没後のことである。『時事新報』社説「進退伺」(一九〇一年八月三〇日)への言及が最初のもので、「日本国民の気風」に関する注目すべきものと評している。⁽²⁴⁾『月報』ではこの時期から一九二〇年末まで『時事新報』の記事が折に触れて言及されており、「我国新聞界の巨頭」⁽²⁵⁾と評された同紙が日常的に読まれていたと考えられる。⁽²⁶⁾

『月報』には『時事新報』記事の引用もみられる。大正時代のある号には、一八八七年四月に伊藤博文が首相官邸で催した仮装舞踏会⁽²⁷⁾に関する過去記事を転載し、後書きに「粉飾的欧化政策当時を髣髴すべし」との評を付している。⁽²⁹⁾

『月報』では、『時事新報』から海外事情も参照されている。組合教会の朝鮮伝道を問題視していた柏木は、三・一独立運動に強い注意を向けており、『時事新報』の記事から提岩里事件に関する情報を入手していた。⁽³¹⁾

『時事新報』は、第一次世界大戦以後、軍縮の必要性を訴えていたが、⁽³²⁾柏木はその陸軍軍縮の主張に賛意を示している。⁽³³⁾ただ、この時期以降、『月報』では『時事新報』記事への言及が見られなくなる。一九二二年四月、時事新報社では人事紛争が原因で石河幹明ら幹部が退社しているが、柏木は紙面の変化を感じ取っていたのかもしれない。

二 『上毛教界月報』と福沢諭吉

柏木が福沢の名に接したのは、『世界国尽』⁽³⁴⁾や『学問のすゝめ』、また郷里の私塾の輪講で学んだ『西洋事

情』の著者としてであったと思われる。

柏木は同志社の第一期学生時代に、京都で交詢社による反キリスト教演説会に立ち会っている。同志社の第二期学生時代には、『時事新報』の社説「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」に感銘を受けるなど、彼は青少年期から福沢と様々な局面で出会っていた。

柏木は同志社在学中から文筆活動を開始しているが、『月報』以前の文章には、福沢への言及がみられず、この時期の福沢への関心がどのようなものだったかはわからない。柏木が安中赴任後に創刊した『月報』では、福沢への言及が多々みられるようになる。

『月報』初期には、福沢は「福沢翁」、「福沢氏」などと呼称され、敬意をもって遇されているとはいえない。福沢の逝去時にも『月報』に追悼記事が掲載されることはなかった。日露戦争以後、福沢は「福沢先生」と呼ばれ、しばしば新島襄と並んで賞賛されることになる。その福沢評価の変化には、同時代の『時事新報』の言論活動への評価（本論第四節）も関わっていたと思われる。

『月報』には、福沢と関わりを持った森村市左衛門、左近義弼⁽³⁵⁾、尾崎行雄⁽³⁶⁾らに関する記事が掲載されていたが、彼ら福沢人脈への敬愛の念も柏木の福沢への評価と不可分であったと思われる。

（１）初期の『月報』

（１）「修身要領」批判

福沢は晩年、門下生らの協力を得て「修身要領」を作成した。一八九九年二月に公表されると、「修身要領」は福沢精神に立脚した倫理綱要として多くの論議を呼ぶことになった。

柏木は『月報』で「修身要領」を直接取り上げることとはなかったが、当時から関心を抱いていたようである。井上哲次郎が「修身要領」を批判した論説「道德主義としての独立自主」(『太陽』一九〇〇年五月)を発表した時、柏木は「日記」の中で来客がこの井上の議論に感心していたこと、柏木自身はこの論説に批判的であることを記している。⁽³⁸⁾

もっとも柏木自身は「修身要領」に批判的で、「人格の不滅を論じて非宗教的道德の根基を問ふ」(『月報』四六号、一九〇二年八月)では「修身要領」を念頭に、「三田流の道德」は人格の完成を目的としない処世術に過ぎず、結果的に人間を「器械」にして「人心を軽浮ならしむるに過ぎ」ないと書いている。⁽³⁹⁾

(ii) 福沢諭吉の「非宗教性」

『月報』で初めて福沢の名前が言及されたのは、「宗教的道德か、非宗教的道德か」(『月報』一四号、一八九九年十二月)である。「修身要領」に宗教的根柢の不在を認めた柏木は、福沢本人への批判の必要を認めていたのであろう。

この論説は、新島襄や吉田松陰を「宗教的道德家」に、福沢を「非宗教的道德家」の代表格に見立てたうえで、「人生を一時の戯れ」⁽⁴⁰⁾とする福沢も無意識下では宗教的信念を抱いていたのではないかと指摘する。⁽⁴¹⁾

吾人は福沢翁の道德と雖ども縦し意識的には宗教なきも其無意識の処には宗教的の信念の之が根柢たるものなきを得ずと思惟するなり。見よ、翁が人生観たる「人生本来戯と知りながら、此一場の戯を戯とせずして恰も真面目に勤むる」てふ純然たる非宗教的見地は如何に自家相矛盾し、道德の根柢の薄弱なること

よ。吾人は翁が道德の實際的根柢は別に翁が意識せざる所に存し、翁が此見解は寧ろ翁が既有の道德に説明を試みたるものに過ぎずと為すなり。此の如き自家相矛盾せる薄弱なる人生觀が如何ぞ世の道德を支持するを得んや。

この時期以降、柏木は福沢を肯定的に取り上げることが多くなり、福沢の非宗教性を非難することはなくなった。

一九一二年初頭、福沢の第四女志立滝は、組合教会の牧師宮川恒輝から受洗している。滝は組合教会の機関紙『基督教世界』に父親の思い出を語っているが、その記事「父の宗教」の中で「福沢は）若い時分は日本を文明開化に導く為に専ら物質的文明の為に盡したのですが、晩年大に精神界の為に盡す考えであったと思われます」と述べていた。⁽⁴²⁾ 柏木はこの談話に興味を抱いて、『月報』にその全文を転載している。⁽⁴³⁾ 柏木は、福沢がキリスト教容認に転じて以降、福沢家からキリスト教徒が生まれるに至ったことを指摘しているが、福沢を評価する彼にとって福沢家にキリスト教信仰を生み出す素地が育まれていたことは喜ばしいことだったのである。⁽⁴⁴⁾

(2) 福沢諭吉と新島襄——近代日本の二大偉人

柏木は『月報』で福沢を新島襄とともに取り上げることが多く、この二人を「明治の二大平民」、「二大教育者」と呼んでいる。⁽⁴⁵⁾ 柏木は師の新島を近代日本最高の偉人とみなしており、彼がこの新島と並べて福沢を賞賛していること自体、福沢への高い評価を物語るものであった。

ただキリスト者の柏木は、福沢がキリスト教信仰を欠くゆえに人格尊嚴の点で徹底しない面があるとも考えていた。⁽⁴⁶⁾彼は、「良心の自由の根底には、人が何の權威にも屈せず直ちに聖なる神の声に聴従すると云ふものがなければならぬのに、其の信仰のなかつた先生の独立自尊には、此の深奥なる權威を欠き、実に惜しむ可きの至りであつた」と書いている。⁽⁴⁷⁾

以下、福沢と新島との相違及び共通点について、柏木がどのように見ていたのか確認したい。

(i) 制度的変革と迂遠の道

一九〇〇年二月、安中教会で開かれた新島没後一〇周年の記念会で、柏木は「吾人の眼に映じたる新島襄先生」という講演を行っている。ここで福沢に触れて次のように述べている。⁽⁴⁸⁾

政府の力に由らずして国家の為に盡くさんとしたる者は只僅に我新島先生と福沢諭吉氏とありしのみ。然れども福沢氏と雖ども戸毎に説き人毎に諭すと云ふが如きは迂遠の事なりと自ら言はるゝ程にて尚ほ制度組織に頼で一とからげに機械的に社会を改造せんと計らるゝものに似たり。

ここで典拠とされたのは、『文明論之概略』の一節と考えられる。⁽⁴⁹⁾福沢は、同書第六章「智徳の弁」で、「結局忠告に由て人を善に導くの領分は甚だ狭し。いわゆる毎戸に諭すべからず毎人に説くべからずとは即ちこの事なり」と書いている。⁽⁵⁰⁾

ただ福沢は、柏木が彼に帰せたような「戸毎に説き人毎に諭すと云ふが如きは迂遠の事なり」(傍点引用者)

という文言を残してはいない。⁽⁵¹⁾ 柏木は、後年にも「戸毎に説き人毎に諭す」という語句に関して福沢に批判的言及をしているので、思い込みによる誤解が固定観念になっていたものと推測される。⁽⁵²⁾

この講演で新島は「戸毎に説き人毎に諭す」という迂遠の道をたどることによって人々の「心霊を改変」し、「真正なる文明社会」の創出を目指していたと称えられている。⁽⁵³⁾ その一方、福沢の教育観は、「制度組織」に依拠して「器械的」に社会改造を計るものと評されていた。この「制度組織」による「器械的」な社会改造とは、柏木が文部省の教育方針への批判に際して用いた語句であり、福沢の教育方針を官学的とみなしているに等しい。

実際のところ、『文明論之概略』のこの箇所は、徳育では個々人の適性への考慮が不可欠であるが、知育面においては集団的指導が可能であると述べているにすぎない。ここでの柏木の議論は、新島記念の講演という性格上、福沢との差別化が行き過ぎてしまったものと思われる。

事実、この講演の数年後、柏木は福沢と新島の二人を「官権主義の教育と対峙」した「日本教育界の救世主」と称えている。⁽⁵⁴⁾ また新島没後二〇周年の際、柏木は「両先生とも官学画一器械的教育の弊を看破して独立の国民は人民自ら教育して其独自一個發揮せざる可らずと為し、滔々たる政府万能の潮流の中に（中略）呼号した」と書き、新島と福沢の二人を優れた私学教育者とみなしている。彼は、民主主義の発展に不可欠な批判意識の育成が官学教育では不可能とみなし、⁽⁵⁵⁾ 自主・自由の討究を可能にする同志社や慶應義塾などの私学に期待を寄せたのである。⁽⁵⁶⁾

柏木は、また別の記事で「明治維新の建設的方面の大半」は福沢の力によるもので、各界に「新人物を供給して明治の文化を築き候ものは実に先生の慶應義塾」であったと福沢と慶應義塾の社会的貢献を評価して

いる。⁽⁵⁷⁾

(ii) 「実現」した福沢の事業と「未完」の新島の事業

一九二八年一月、柏木は東京の新島記念会で「新島襄先生伝に就いて」を講演した。そこで彼は新島と福沢を「明治時代に与えられたる日本の二大偉人で、そのともに大平民であった」と前置きしながら、次のように二人を比べている。⁽⁵⁸⁾

福沢先生は、人が二、三年後にやる事を二、三年前に言う人で、数千歩先きに行けば人がついて来ませんから常に二、三步先に立て行く人でありました。百年の大計など申す事は先生には或は無意義で、新島先生が「同志社の事業は二百年を期す」と云われたのに、勝海舟伯が感心せられたそうではありますが、そんな事は福沢先生には空想かも知れません。されば、福沢先生の事業はなかなか大きなものであるが、概ね皆世に実現して既に過去のものとなつて仕舞つています。

この講演で、柏木は新島の志した事業を「未完」のものとし、福沢の事業をほぼ実現された「過去」のものと対比している。新島が日本のキリスト教化という遠大な志を抱いていたことは事実だが、二人の比較に際してそれぞれの事業内容が示されることもなく、ここでも柏木は両者の差別化にあたつて無理をしていると言わざるをえない。はたして福沢の理想が概ね実現していたとするなら、柏木自身が『月報』で福沢に言及しながら、日本社会の現状に批判の矢を向けることはなかったであろう。

(iii) 二人の「平民」——福沢と新島に共通するもの

このように柏木は時に福沢と新島の相違を強調しているが、この二人を取り上げた『月報』記事の多くは、両者を同時に賞賛するものである。⁽⁵⁹⁾この事実は、柏木にとって福沢と新島の共通性こそが重要であったことを示している。

柏木が二人の共通点として認めていたのは、両者が「明治の平民」であったことである。彼は、福沢と新島がそれぞれ世俗の階級や位階に価値を認めず、むしろ民間人としての誇りを抱いて生涯を送った事実を重くみた。

柏木は民主主義の根本を「個々人格の神聖尊厳」に認めており、個人がただ個人として尊重される社会にのみ、自由で民主的な社会の礎が築かれると考えていた。その彼にとって、福沢と新島は日本社会のデモクラシー化への道を明治時代に初めて開いた人物として受け止められていた。新島は大正大礼時に贈位されたが、彼がこの措置を先師の心を蔑にするものと批判したのもそれゆえである（本論第五節）。

三 『上毛教界月報』と福沢の著作

幕末に生まれた柏木は幼少期から福沢の著作に親しんでいた。『月報』の社会批判の記事では折に触れて福沢の文章が援用されたり、彼の福沢への親炙がうかがえる。本節では『学問のすゝめ』と『福翁自伝』の記述がどのように『月報』に用いられていたのかを確認する。

(1) 『学問のすゝめ』

(i) 「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」

柏木は『学問のすゝめ』の冒頭の一句「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」を『月報』で頻繁に引用しており、愛好の言葉であったようである。⁽⁶⁰⁾

柏木はユニテリアンのアメリカ人牧師W・E・チャニングの「人間てふ名号は、帝王と云ふよりも、大統領と云ふよりも、尊貴なるなり」という成句を好んで引用していたが、福沢の一句はよくチャニングの言葉と同じに使われている。柏木にはこの福沢の言葉は、日本人による社会平等の理想を表明した歴史的発言として受け止められていた。

『月報』で初めて「天は人の上に人を造らず」の句が掲載されたのは、部落差別を批判した文章においてである。⁽⁶¹⁾ 柏木は、その後、国家主義を批判し、自由な個人からなる民主社会の実現の必要性を訴える際、しばしば福沢のこの一句を引いている。⁽⁶²⁾

(ii) 楠公権助論

『学問のすゝめ』に関しては、福沢が楠木正成の忠孝を旧弊なものと批判した楠公権助論が『月報』で触れられている。⁽⁶³⁾

一九一二年六月、組合教会の牧師の講演が楠木正成を冒瀆するものとして問題視されたことがあった。⁽⁶⁴⁾ この事件を論評した柏木は「明治の初年、故福沢先生が、楠公湊川の死を以て権助の首縊りに比して以て世人を驚

かしたるは、言矯激に失したりと雖も、聊か亦死を一大事とする旧思想を打破するの微意なきにしも非ざりしなる可し」と書いてゐる。⁽⁶⁵⁾『学問のすゝめ』は、柏木には「人心を因習道德の桎梏より解放」しようとした「急進主義の社会改革家」の書であつた。⁽⁶⁶⁾

(2) 『福翁自伝』

『福翁自伝』は柏木の愛読書で、機会ある時に再読してゐたようである。⁽⁶⁷⁾『月報』の記事では、福沢の生涯の逸話を用いて時事批判が行われている。

(1) 幕末期の福沢

① 福沢の処世

日露戦争時、柏木は非戦論の立場に立っていたが、日本のキリスト教界では戦争に協力するものが多く、非戦論者は柏木や内村鑑三など少数派であつた。柏木は非戦論に立つ自身を弁護するなかで、幕末、戦乱の世情に背を向けた福沢の処世を想起して次のように書いてゐる。⁽⁶⁸⁾

吾人の如く、今回の戦争に賛同せざる者は、基督教徒中に在ては殆ど九牛の一毛のみ。然れども（中略）上野山内戦ひ、正に酣に飛丸其窓を掠むるにも係らず、泰然自若鉄砲洲の書塾に在て読書三昧に入りたる福沢論吉翁の如きもあり。人各々其所信に従はんのみ。

柏木は武士道礼賛の風潮に批判的⁽⁶⁹⁾で、乃木将軍の自刃に際してもこれを批判しているが（本論第四節）、彼にとって福沢は、封建的な武士道を顧みず、西洋文明の導入を一心に努めた人物として受け止められていた。⁽⁷⁰⁾

② 加藤弘之批判

柏木は、加藤弘之がキリスト教を批判した『吾国体と基督教』（一九〇七年）の刊行時、『月報』で同書を論評している。柏木にとって加藤は過去の論争相手で、加藤の論説「仏基両教の急処を衝く」（『太陽』一九〇〇年九月）をめぐって応酬を交わしたことがあった。⁽⁷¹⁾

柏木は『吾国体と基督教』を批判する中で、戊辰戦争時に江戸城で福沢と加藤弘之が会話を交した『福翁自伝』⁽⁷²⁾の一場面を引用し、「実に面白い。今博士が国体論を振り舞って世界的宗教に挑戦せらるゝ所は、当年千代田城内社杯の光景が眼前に見えるようである。併し今日博士と一味して世界的宗教と戦う彰義隊が果してあるであらうか（中略）吾人は深く博士が老いて時勢に後れられたのを惜しむ⁽⁷³⁾」と書いている。柏木は、「悲憤慷慨」して「武士道とか云ふものを發揮」した加藤に対して、戦争になるなら逃げだすと答えて加藤を啞然たらしめた福沢について、その「眼中」にあったのは、新政府との争いなどではなく、「文明の大局」であったと賞賛している。⁽⁷⁴⁾

（ii）幼少時代の福沢

柏木は明治後期から学童への神社参拝の強制を問題視し、国家神道への批判を開始している。『福翁自伝』には、幼少時代、神様を崇拜する長兄に反発した福沢が神棚の札を便所に落としたり、稲荷の

神体を石と取り換えたりする話が語られている。⁽⁷⁵⁾ 柏木にとってこの逸話は印象深いものであったようで、大正期から昭和期にかけて、政府の教育政策を批判するうえでよく引用している。⁽⁷⁶⁾

柏木は神社参拝の強制を「信教の自由」への侵害とみなし、政府がその政策の根拠とする神社非宗教説を詭弁と批判した。そして神道が実質的には原始的宗教にすぎず、神社で祭られる「祭神の如きも頗る低劣に非ざれば分けの分からぬもの」が多いとし、学童には「少年時代の福沢先生の如く腹の中には笑い居る者」が少なくないはずだと書いている。

柏木は教育現場における御真影護持を偶像崇拜として批判していたが（本論第四節第二項）、一九三五年五月号の「偶像と教育」では、『福翁自伝』に言及しながら次のように書いている。

福沢先生は其の『福翁自伝』中に幼時近辺の社堂の中に何が祭つてあるかと好奇心より之を取り出して見たら唯石であつたので、何んだ石を神様だと云ふて拜んで居ると言ふて笑つて居らるゝが、これが即ち技巧なき自然の声であらう。⁽⁷⁷⁾

この記事は、内務省警保局の目に留まり「御真影ヲ偶像視シ且之ヲ無視スルガ如キ不敬ノ言辭アルニ因リ」⁽⁷⁸⁾ 発禁処分を受けている。富田正文によると、この時期、菊池寛は『福翁自伝』の幼少期の記述が官憲から問題視される可能性を危惧していたが、⁽⁷⁹⁾ この柏木の筆禍は、菊池の懸念が決して杞憂ではなかったことを示しているよう。

四 『上毛教界月報』における『時事新報』

前節で確認したように、『月報』には多くの福沢関連の記事が掲載されていた。また同紙では、『時事新報』の記事も各所で参照されている。

『月報』には様々な刊行物が情報源として用いられており、『時事新報』もその一紙にすぎない。ただ柏木は『時事新報』を福沢の衣鉢を継いだ新聞として思い入れを持っていたように思われる。本節では、以下、柏木の『時事新報』記事への関心を時系列的に見ていきたい。

(1) 『時事新報』とキリスト教

福沢の晩年より『時事新報』の論説主幹を務めたのは石河幹明である。福沢⁽⁸⁰⁾と同様に、石河主筆時代の『時事新報』も、宗教を「経世の用具」とみなし、一般民衆に向けた人心教化の手段として重視していた⁽⁸¹⁾。ただ、福沢が仏教に好意的であったのに比べると、石河はむしろキリスト教に好意的であったと思われる⁽⁸³⁾。

日露戦争時、キリスト教青年会は、戦地での慰問活動などの支援が認められ、皇室から恩賜金を贈られている⁽⁸⁴⁾が、石河は社説「基督教青年会への恩賜」でこの出来事を取り上げ、キリスト教会の日本社会への貢献を高く評価した⁽⁸⁵⁾。日露戦争時に非戦論を唱えていた柏木だが、キリスト教団体が社会的評価を獲得したことは嬉しかったようで、『月報』でこの石河社説を引用している⁽⁸⁶⁾。

(2) 御真影問題

一八九一年六月制定の「小学校祝日大祭日儀式規程」により、祝祭日の学校行事において、教育勅語の奉読と御真影（天皇・皇后の公式写真）への最敬礼が義務付けられた⁽⁸⁷⁾。

御真影の護持が原因で教育者から最初の犠牲が生まれたのは、一八九六年六月の三陸大津波の時である。この時、『国民之友』や『国民新聞』は、御真影のために失命することの無意義さを訴えたが、一部の読者から不敬の論との批判を受けている⁽⁸⁸⁾。

『時事新報』が御真影の問題を取り上げて世論を喚起するのは、福沢没後のことである。石河幹明は、社説「今日の修身処世法を如何す可きや」（一九〇〇年二月二五日）で、「古来の徳教」は時代に適合せず、文明社会に相應しい新倫理の確立すべきことを唱えていた⁽⁸⁹⁾。「修身要領」作成者の一人の石河は、この時期から教育政策への批判の必要を感じていたのであろう。『時事新報』では、一九〇〇年代以降、御真影による殉職の犠牲の非を説く社説が繰り返し掲載され、石河がこの問題の重要性を認識していたことが明らかである⁽⁹⁰⁾。

柏木は、石河の社説「御真影に関する出来事に就て」を『月報』で取り上げて、過去に御真影に関して美談を報じもした『時事新報』⁽⁹¹⁾が、御真影を批判するに至ったことに言及している⁽⁹²⁾。柏木も『月報』で度々御真影を批判しており、その批判において柏木と『時事新報』は問題意識を共有していたといえる⁽⁹³⁾。

大逆事件の折、石河は一連の社説で政府を批判したが、その一篇「極端苛烈の気風」⁽⁹⁴⁾（一九一一年一月三日）で教育勅語と御真影を取り上げている⁽⁹⁵⁾。この当時の『月報』には、大逆事件を論じた『時事新報』記事への言及は確認できない。ただ、柏木自身が社会主義者との交友関係から警察の監視下に置かれていたことを考

えると、⁽⁹⁶⁾ 柏木が石河の関連社説に注目していなかったとは考えにくく、同紙の勇氣ある政府批判に共感を覚えていたと想像される。

柏木は、慶應義塾で学長を務めた鎌田栄吉が文部大臣（加藤友三郎内閣）に就任した時、「教育勅語と御真影に関する教育政策」を改めることを鎌田に期待している。⁽⁹⁷⁾ このような鎌田への期待は、⁽⁹⁸⁾ 『時事新報』の論調への信頼と無縁ではなかったはずである。

（3）乃木希典の自刃

乃木希典は、一九一二年九月一三日、明治天皇の大喪の礼が行われた日に自宅で夫人とともに自刃した。この殉死は日本社会に大きな衝撃を与え、以降、様々な媒体で乃木賛美論が発表され、乃木の神格化が進んでいくことになる。⁽⁹⁹⁾

『時事新報』は、乃木自刃の翌々日、「乃木大将の自殺」（一九一二年九月一日）を掲載し、乃木の自殺を批判した。⁽¹⁰⁰⁾ この石河幹明の社説は、乃木にとって新たに大正天皇に仕えることこそ明治天皇への忠義を尽くすゆえんであったと説き、世間がその自殺を武士道の精神の現れと称賛することは人心に害を与えかねないと批判するものであった。⁽¹⁰¹⁾ 時事新報社にはこの乃木批判のために抗議の脅迫状が多数送られてきたという。⁽¹⁰²⁾

キリスト教界でも乃木自刃を賛美する評価が行われるなか、柏木は「乃木大将と自殺」を『月報』に掲載して、乃木の死を公然と批判した。⁽¹⁰³⁾ そして柏木は、⁽¹⁰⁴⁾ 『時事新報』が乃木の自刃を批判したことを評価し、「福沢先生之余香」のなかで次のように書いている。

所謂壮烈の事を白眼もて看過し、平然淡然滔々たる俗論に頓着せず、真一文字に泰西文明に急進し、独立自尊、平民の為に一大気焰を挙ぐるの所、吾人は先生（福沢諭吉―引用者注）の一代に於て寧ろ一代壮烈の行爲を見るのである。今や先生逝て数年復た先生の如き大気魄の人を見る能はざるを憾む。唯、乃木大将自殺の事あるや、大勢は滔々として感情に趨り、当然自殺に関して武士道に同ぜざる可く社会が予期したる基督教側からさへ自殺の壮烈を賛するの声聞ゆるの時、『時事新報』が純理の方面より感情に没せざるの論議を唱道したるは流石は福沢先生の遺流と稍々意を強ふするものがあつた。

柏木はまた、時事新報社などが乃木批判に関して脅迫行為を受けたことに関して、「多数を恃んで言論の自由を圧迫するが如き寧ろ言論の敵である」と批判している。⁽¹⁰⁵⁾

五 柏木義円と贈位問題——徳富蘇峰との関連で

（1）大正大礼と贈位

（i）福沢諭吉の贈位回避

大正天皇の即位大礼は、一九一五年一月京都で行われた。この大礼に際し、叙勲や授爵、または故人への贈位が行われている。

時の大隈重信内閣は、福沢諭吉に従四位を授与する予定であつたが、事前にその情報を知った石河幹明ら義塾関係者の奔走によって、その贈位の阻止に成功した。⁽¹⁰⁶⁾ 福沢の関係者が彼の贈位に反対した背景には、福沢本

人が生前爵位や勲章を受けることを嫌い、また贈位に否定的だったことが知られていたからである。⁽¹⁰⁷⁾

『時事新報』は福沢没後も贈位に関して批判的な立場を取り続けていた。石河幹明は幕末の志士への贈位に關して人物評価の点から疑義を呈していたが、⁽¹⁰⁸⁾また、福沢の師緒方洪庵が一九〇九年六月に従四位を受けた際にも、石河は祝意を表しながらも贈位制度の問題点を指摘することを忘れなかった。⁽¹⁰⁹⁾

『時事新報』では、大正大礼の際、福沢に贈位の予定があったことは報じられていない。ただ石河は社説「故人の論功行賞」(一九一五年一月一三日)で福沢を念頭に置きつつ次のように書いている。

真実心の底より人爵を受くるを潔しとせず、一平民を以て其生涯を全うしたりしが如き人に対し、輕率にも贈位の恩典など奏薦することありとせば如何。其人の生前ならば如何様にしても之を辞退することならんと雖も死後に於ては如何とす可からず。其平生の心事を知るものに於ては恰も侮辱を与へられたるが如き感を為して深く心を痛ましめざるを得ず。斯くの如きは恩典は人の心を喜ばしめざるのみか却て之を苦しむるものと云ふべし。

福沢の贈位辞退は、当時、『時事新報』以外の新聞で報じられ、⁽¹¹⁰⁾一般にも知られていたようである。三宅雪嶺は『贈位功臣言行録』の序文で福沢の贈位辞退に言及し、特に問題ある行為ではないと擁護している。⁽¹¹¹⁾

(ii) 新島襄の贈位

大正大礼の際、社会事業や教育、実業方面で活躍した人々に叙位や叙勲が行われたが、その中にはキリスト

教徒も多く含まれていた。この時、同志社創立者の新島襄に従四位、彼の協力者の山本覚馬に従五位の贈位がなされている。⁽¹¹²⁾

徳富蘇峰は、師の新島の贈位に関して第三者として歓迎する感想を公にしているが、⁽¹¹³⁾ 実のところ、新島の贈位に向けて大隈重信に働きかけていたのは蘇峰であった。⁽¹¹⁴⁾ 同志社当局も新島の贈位を皇室からの恩恵と感謝して受け入れている。⁽¹¹⁵⁾

もともと新島の贈位に批判的な人々も存在していた。蘇峰の実弟の徳富蘆花は、日記に新島贈位をめぐる同志社の対応を批判している。⁽¹¹⁶⁾ 内田魯庵も『太陽』誌上で福沢に言及しながら新島の贈位に疑問を呈していた。⁽¹¹⁷⁾

(iii) 『月報』と贈位問題

大正天皇の即位大礼時、新島襄の贈位を知った柏木は、平民主義を誇りにした師が、死後、人為的な位階を受けるにいたった事実⁽¹¹⁸⁾に衝撃を受けた。柏木にとって新島の贈位は無念極まりない事態であり、晩年に至るまで師の贈位を受け入れた同志社の不見識を批判している。その際、福沢の贈位回避に動いた福沢門下を賞賛することもしばしば忘れなかった。⁽¹¹⁹⁾

福沢の贈位回避に触れた『月報』の記事に、福沢と贈位問題に関して詳しく記載されている一篇がある。⁽¹²⁰⁾ 柏木は特に断っていないが、折から刊行された石河幹明の著作『福沢諭吉伝』⁽¹²¹⁾を参考に執筆されたものと考えられる。石河はこの著書で福沢の贈位回避に動いた顛末を記していたので、⁽¹²²⁾ 柏木はその経緯を知り、羨望の念を禁じ得なかったであろう。

新島の贈位実現に向けて尽力していたのは蘇峰であったが、柏木は、その事実を関知していなかったようだ

ある。しかし、もし彼がその事実を知っていたなら、蘇峰を厳しく批判していたであろうことは疑いを容れない。

(2) 徳富蘇峰の新島・福沢評価

柏木は晩年、新島襄の伝記執筆を志していた。この新島伝の完成を見ることなく柏木は亡くなったが、その資料提供の協力者の一人は、徳富蘇峰であった。当初、新島伝の執筆要請を受けていたのは蘇峰であったが、彼は非信者の自分が宗教者としての新島を描くには不適任と考え、柏木にその執筆を期待したのである。⁽¹²³⁾この経緯に見るように、柏木と蘇峰の間には浅からぬ人間関係があった。

もっとも、柏木は以前から蘇峰の政治観を問題視しており、大正期の蘇峰のベストセラー『大正の青年と帝国の前途』(民友社、一九一六年)を「亜細亜モンロー主義と軍国主義の鼓吹」と批判している。⁽¹²⁴⁾

その後、蘇峰と柏木との間の思想的対立が顕在化したのは、外ならぬ新島評価においてであった。一九三五年一〇月、同志社創立六十周年記念に招かれた蘇峰は、講演「日本精神と新島精神」で、もし新島が今日存命であるならば、彼が皇室中心主義者になって、「日本精神」を宣揚していたことは疑いないと語った。⁽¹²⁵⁾この蘇峰の新島評価に対して、柏木は『月報』で反論し、「先生と徳富氏と最も相得て殆ど同心一体の観ありしは蓋し先生御享去前後数年の事」にすぎず、その後の蘇峰が「日本帝国主義の大立者」となった以上、「先生亦其迄も氏に追隨被遊候へしや」と痛撃している。⁽¹²⁶⁾

このように、蘇峰と柏木の間では新島の評価において対蹠的なものがあった。⁽¹²⁷⁾この評価の違いは、彼らの福沢観の差につながっていたように思われる。

太平洋戦争渦中の一九四四年三月、大日本言論報国会の会長であった蘇峰は、功利主義を唱えた福沢が「日本の従来の良風美俗をして地に払ふに至らしめ」、「独立自尊」の個人主義をもって非愛国主義的な風潮を助長していると批判した（『蘇翁漫談』『言論報国』一九四四年三月）⁽¹²⁸⁾。若き日の蘇峰は、「福沢論吉君と新島襄君」（『国民之友』一八八八年三月）で、福沢と新島を新時代の二大教育家と称えながら、福沢を「物質的知識」の教育者、新島を「精神的道德」の教育者と対比していた⁽¹²⁹⁾。その半世紀後、蘇峰は新島を「日本精神」の潜在的体現者とする一方で、福沢を「日本精神」の破壊者として指弾するまでに至ったのである。

この「蘇翁漫談」が発表された時、すでに柏木はこの世の人ではなかったが、福沢の「独立自尊」にデモクラシーの精神をみた柏木にとって、この蘇峰の評価が許容できるものであったとは思われない。「日本精神」なる観点からの福沢と新島の差別化は、両者の共通点を重視した柏木の評価とは全く異質のものであった。もし柏木が存命であつたならば、蘇峰の福沢評価に憤激して批判を向けていたことは確実である。

六 晩年期の『新生命』への寄稿

『月報』は一九三六年一二月に四五九号で廃刊となった。以降、柏木は編集実務から退き、後継紙『新生命』⁽¹³¹⁾には一寄稿者として関わっている⁽¹³²⁾。

軍国主義への批判的姿勢を崩さなかった『月報』と異なり、『新生命』では国家主義的動向への迎合が現れるようになる⁽¹³³⁾。盧溝橋事件の勃発に際し、組合教会総会では「国民精神総動員の運動」への積極的参加が謳われ、⁽¹³⁴⁾ 柏木の生前、『新生命』では日本軍の中国出兵を「防共の聖戦」と呼ぶ論説が掲載されるに至っている⁽¹³⁵⁾。

柏木の『新生命』寄稿文は身辺雑事や回想が多くを占めていたが、この時期でも柏木は時勢への抵抗の意思を失つてはいない。⁽¹³⁶⁾ 社会情勢への直截な批判を封じられた柏木は、老実業家からの書簡の紹介という体裁でファシズム批判を試みている。⁽¹³⁷⁾ また友人の死去を悼む書簡からの抜粋という形で、人間が「確信と努力」を怠らない限り、社会が「進歩とも善化とも改良ともなる希望」があるとの信念を語つてもいる。⁽¹³⁸⁾

このような状況下、柏木は福沢に触れた短文を数編『新生命』に書いている。

『月報』が廃刊された同月、折しも『時事新報』は経営悪化による廃刊を余儀なくされていた。柏木は、『新生命』に「時事新報の廃刊」の文章を寄せたが、そこで福沢の社説「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」を想起して、「欧米諸国と同色の宗教を信ずるはこれ保護色以て国民を保つ所以の理」とする論旨を「尚ほ記憶する処」と書き、「同紙の廃刊を聞いて今昔の感に不堪候^{たえが}」と結んでいる。⁽¹³⁹⁾

柏木は、福沢を評価する記事も寄稿し、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」(『新生命』四六一号、一九三七年二月)では、福沢が終生「明治の平民」であったと賞賛している。また「福沢先生と新島先生」(『新生命』四六八号、一九三七年八月)では、福沢が官位とは生涯無縁で、「人の上にも又人の下にも」立つことがなかったと述べ、新島に関しては「先生亡き後の今は、贈位とか云ふ肩書が付き候、これ蓋し福沢先生の後継者と同志社当局者との用意の差にて可有^{これあるべく}之候か。当時同志社の当局者は誰か」とここでも同志社当局の不見識を問いただしている。

このように柏木は晩年に至るまで「平民」福沢を賞賛する言葉を書き続けていた。日本社会のデモクラシー化を希求していた彼にとって、福沢の存在がいかに心の拠り所となっていたかを物語るものである。

おわりに

本論では、『上毛教界月報』を取り上げ、柏木義田の福沢諭吉及び『時事新報』観を考察してきた。従来、柏木の福沢観は彼の新島襄評価との相違点から論じられる傾向がみられたが、本論では柏木が福沢と新島に共通するものとして「平民主義」を重視していたことに注目した。

柏木は、新島を近代日本の最高の偉人と尊敬していたが、彼はしばしば福沢も新島と並ぶ偉人として賞賛していた。福沢のキリスト教信仰の欠如を残念に思っていたが、官とは距離を置いた独立自尊の生涯と進歩主義には深い敬意を抱いていた。柏木は、福沢や新島の「平民主義」の精神こそが健全なデモクラシーの発展を日本社会で可能にすると考えていた。

柏木は『月報』で社会批判を活発に展開したが、しばしば福沢の人生に言及し、その著作の文章を武器に用いていた。そして『時事新報』の言論活動を福沢の衣鉢を継ぐものと評価していた。

柏木が福沢から受けた感化には多大なものがあり、福沢がキリスト教界に与えた影響の一事例として重視されるべきものと考ええる。

注

- (1) 本論の『上毛教界月報』（以下、『月報』と略記）からの引用は、下記の復刻版に拠る。『復刻版 上毛教界月報』全一二巻、不二出版、一九八四—一九八五年（以下、注の括弧内に復刻版の巻数、頁数の順で表記）。

- (2) 柏木義円に関する研究動向については、下記の文献が詳しい。市川浩史「柏木義円」『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館、二〇〇四年、一一六―一一七頁。
- (3) 武田清子「柏木義円の臣民教育批判」『人間観の相剋——近代日本の思想とキリスト教』弘文堂、一九五九年。
- (4) 伊谷隆二編『柏木義円集』一卷、未來社、一九七〇年。同二卷、一九七二年。
- (5) 片野真佐子「孤憤のひと柏木義円——天皇制とキリスト教」新教出版社、一九九三年。同『柏木義円——徹底して弱さの上に立つ』ミネルヴァ書房、二〇二三年。
- (6) 飯沼二郎・片野真佐子『柏木義円日記』行路社、一九九八年。片野真佐子編『柏木義円日記補遺』行路社、二〇〇一年。同編『柏木義円書簡集』行路社、二〇一一年。同編『柏木義円史料集』行路社、二〇一四年。
- (7) 片野真佐子『柏木義円』、一八七、二二五頁。「解説」『柏木義円史料集』、四三八頁。
- (8) 片野真佐子「孤憤のひと柏木義円」、三三四頁。
- (9) 伊藤正雄「福翁目伝」はいかに読まれてきたか——山路愛山から佐伯彰一氏まで』『福沢論吉——警世の文学精神』春秋社、一九七九年。
- (10) 伊藤正雄編『明治人の観た福沢論吉』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年。
- (11) キリスト者の福沢観に関しては、植村正久や内村鑑三に関する研究が行われている。吉駒明子「植村正久の福沢論——『時事小言』批判を中心に」『福沢手帖』一五五号、二〇一二年。川崎勝「内村鑑三の福沢論」同一五四号、二〇一二年。両者は柏木と同世代であったが（柏木は植村の二歳年下、内村の一歳年長、植村は福沢を評価し、内村は福沢に批判的であった。柏木はこの二人を高く評価していたが、福沢観に関しては植村に近かったといえる。
- (12) 小川原正道『福沢論吉 変貌する肖像——文明の先導者から文化人の象徴へ』筑摩書房（ちくま新書、二〇二三年）。
- (13) 西光寺は、後に柏木家から離れている。なお『月報』には仏教批判の記事が度々掲載されているが、時に福沢の

「僧侶は俗より出で、俗よりも俗なり」（『僧侶論』）の文句が引用されている。「宗教選択の標準」『月報』一〇三号、一九〇七年五月（三・三四二—三四五）。

- (14) 「世界の大勢と日本の宗教」『月報』一六二号、一九一二年四月（四・四七六—四七九）。「先師に対する予が懺悔」同三二七号、一九一七年一〇月（六・一一三—一一六）。柏木は、彼の幼少期、『西洋事情』が中村敬宇『西国立志編』、内田正雄『輿地誌略』と並んで当時の三大著書とされていたと回想している。また『西洋事情』は教導職試験の教養問題に関する参考書として重用されていたという。

- (15) 片野真佐子『柏木義円』、一七一—一九頁。「秋山恒太郎氏」三田商業研究会編『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、七三七—七三八頁。「秋山先生を憶ふ」『月報』一五三号、一九一一年七月（四・三六九—三七〇）。「先師に対する予が懺悔」（前掲注（14））。後年柏木は秋山と再会する機会をもったが、その時、秋山は武士道の鼓吹される社会風潮に批判的であり、柏木はさすがに「明治の急進家福沢門下の人」であったと賞賛している。

- (16) 片野真佐子『柏木義円』、vi頁（はしがき）。

- (17) 本井康博「同志社演説会——キリスト教と佛教（一八八〇—一八八一年）」『同志社を掘る——創立百五十年に向け』蒼穹社、二〇二〇年、八八—八九頁。

- (18) 「初め福沢先生の如きは基督教排斥の態度を取居られ、明治十三年の頃かと覚ゆるが、門下の士（中略）を京坂に派遣し、大いに基督教を排撃せしめた事があった。」「世界の大勢と日本の宗教」（前掲注（14））。「四十五年前の追憶——新島先生の逸事」『月報』三三七号、一九二六年二月（八・二八九—二九〇）。

- (19) 拙稿「福沢諭吉の論説「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」とカトリック教会——教皇庁対日外交の始動との関連で」『近代日本研究』三八巻、二〇二二年、一一—二二章。

- (20) 柏木は、この社説に関して「真理に対する態度として云へば、苟くも真理ならば、世界が皆反対しても一人でも毅然として立つ可きであつて、福沢先生の此論は余りに価値はあるまいけれども、仮に同じようで大差なしと云ふ時に

何れを取るかと云ふ場合には、経世の点よりは大に考ふ可き議論であると思ふ」と書いている。「宗教選択の標準」(前掲注(13))。「世界の大勢と日本の宗教」(前掲注(14))。「経世的眼光より見たる基督教伝道」『月報』六九号、一九〇四年七月(二・五九二—五九三)。「我国の危機と基督教」同一五三三号、一九一一年七月(四・三六六)。いずれの記事でも柏木はこの論説を「宗教亦西洋風に従はざる可らず」と誤記している。

(21) 竹中正夫「湯浅治郎」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、一四五一頁。湯浅治郎は、福沢の著作から感化を受け、後、様々な社会事業に貢献した人物である。湯浅三郎「湯浅治郎」湯浅三郎、一九三二年、八頁。

(22) 太田雅夫「吉野作造と柏木義円——吉野書簡を中心に」『同志社談叢』二二号、二〇〇一年。

(23) 「社会主義研究の必要」『月報』七二号、一九〇四年九月(二・六一七—六二〇)。

(24) 「近頃の快論」『月報』三五号、一九〇一年九月(二・一七八)。

(25) 「時事新報の陸軍減縮論」『月報』二七五号、一九二二年一月(七・一三四—一三五)。

(26) 柏木の日記(一九二〇年二月一日)に、「今日ノ時事新報、独逸ノ戦争ノ責任者引渡シニ付テ論ズ、我意ヲ得タリ」の記述がある。『柏木義円日記補遺』、一九六頁。

(27) 福沢はこの舞踏会に招待されていたが、参加を謝絶している。小川原正道「『官』の包囲網」『福沢論吉——「官」との闘い』文藝春秋、二〇一一年、一一七—一一八頁。

(28) 「フワンシーボール」『時事新報』一八八七年四月二二日。

(29) 「一と昔の追憶——伊藤首相邸の仮装舞踏会」『月報』二二三号、一九一六年八月(五・五二四—五二五)。(『時事新報』一八八七年四月二二日号の転載。前掲注(28))。

(30) 「朝鮮統治の現状(五) 過酷なる鎮圧手段・鮮人殺害の実況談」『時事新報』一九一九年六月一日。「朝鮮統治の現状(七) 事件の責任者は誰か・世論は何故に冷淡か」同一一九一九年六月一六日。

(31) 片野真佐子「柏木義円」、一六〇頁。提岩里事件は、三・一独立運動の渦中の一九一九年四月、朝鮮の京畿道水原

郡の提岩里で、日本の憲兵隊が朝鮮人約二十余名を教会に閉じ込めて焼き殺した事件である。小野容照『韓国「建国」の起源を探る——三・一独立運動とナショナリズムの変遷』慶應義塾大学出版会、二〇二一年、一五八頁。

- (32) 中嶋晋平「戦間期における軍縮輿論と新聞——『時事新報』の内容分析を中心に」『マス・コミュニケーション研究』七三巻、二〇〇八年。

- (33) 「結果重大なり——軍備制限問題」『時事新報』一九二一年一〇月一八日。「時事新報の陸軍減縮論」(前掲注(25))。

- (34) 柏木は、一九二二年二月、神道・仏教・キリスト教の代表者を内務省が招いた三教会同を政府による宗教利用とみなして批判したが、その記事で『世界国尽』に触れている。彼は、内務次官床次竹二郎が西洋文明の発展に果たしたキリスト教の功績を評価しながらも、宗教それ自体に対する理解が浅薄なことを指摘し、「明治の初年福沢先生の『世界国盡』に云へり、曰く、花見て花を羨むな、本なき枝に花は無しと」と書いている。「政府の所謂宗教利用」『月報』一六〇号、一九二二年二月(四・四五—四五四)。

- (35) 「森村翁と福沢先生」『月報』一九三号、一九一四年一月(五・二六八—二六九)。「森村市左衛門翁の受洗」同二四号、一九一七年七月(六・八一—八二)。

- (36) 片野真佐子『柏木義円』、一八六頁。

- (37) 片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』、一〇八頁。

- (38) 柏木の日記(一九〇〇年五月二十九日)に、「太陽」ニテ井上博士、福沢氏ノ自尊独立論ヲ駁セシ文章ヲ読ム、其議論ノ更ニ正鵠ニ当リ居ラザルニ此演説ヲ聴聞シテ感服シ来ラレタル某氏ノ事ヲ思ヘ倫理思想ノ教育ノ大切ナルヲ感ス」とある。『柏木義円日記』、二〇頁。

- (39) 「人格の不滅を論じて非宗教的道徳の根基を問ふ」『月報』四六号、一九〇二年八月(二・三〇六—三〇八)。「真善美の礼拝」同二〇号、一九〇〇年六月(一・七九)。

- (40) 柏木は、「人生観」(『月報』五七号、一九〇三年七月)で、『福翁百話』第七話「人間の安心」の一節を引用し、「福翁得意の人生観」と記している(二・四四〇—四四三)。
- (41) 「宗教的道德か非宗教的道德か」(『月報』一四号、一八九九年二月(一・五三))。
- (42) 志立たき子「わが父の宗教」『基督教世界』一五〇四号、一九二二年七月一日。拙稿「志立滝の生涯——福沢諭吉第四女とキリスト教」『近代日本研究』四〇巻、二〇一三年、一八四—一八五頁。
- (43) 志立たき子「吾父の宗教」(『月報』一六六号、一九二二年八月(四・五二六—五二七))。『基督教世界』一五〇四号の転載。前掲注(42)。
- (44) 「四十五年前の追憶——新島先生の逸事」(前掲注(18))。
- (45) 「幕末、天が」民間に与へた二大偉人は、福沢諭吉先生と新島襄先生とであつた。此他の偉人は我國民のものといふには聊か物足りなかつた。」(『新島襄先生を憶ふ』『月報』三五九号、一九二八年二月(九・一四四—一四六))。
- (46) 柏木は、一九三四年三月八日、長男隼雄、四男大四郎、五男寛吾にそれぞれ宛てた書簡で、「明治ニ至リ福沢先生ハ天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラス人ノ下ニ人ヲ造ラスト喝破シテ人格ノ尊嚴ヲ叫ビ一切人爵ヲシリゾケテ身辺ニ近ケス、死後贈位スラ無之、人一人ノ尊嚴ヲ高調セラレ候ヘトモ神ヲ識ラサル先生ニハ尚ホ不徹底ヲ免レス候」と書いている。『柏木義田書簡集』、一三三九頁。『柏木義田史料集』、一三八、一六二頁(各書簡には一〇・三二六—三二七)。
- (47) 「湯浅翁逝いて特に新島襄先生を憶ふ」(『月報』四〇七号、一九三三年九月(一〇・三二六—三二七))。
- (48) 「吾人の眼に映じたる新島襄先生」(『月報』一六号、一九〇〇年二月、一—二頁(一・六三—六四))。
- (49) 柏木は、明治初期の人々に感化を与えた福沢の著作に『文明論之概略』も挙げている。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」(『月報』四三〇号、一九三四年八月(一一・一一五—一一六))。
- (50) この箇所の記述は、『論語』泰伯編「民は之れに由らしむ可し。之を知らしむ可からず」に関する朱子の『論語集注』に拠っている。松沢弘陽校注『文明論之概略』岩波書店(岩波文庫)、一九九五年、一二九、三三三頁(同書注

一二九七)。

(51) この「智徳の弁」の章に「迂遠」の語の使用箇所が存在する(『文明論之概略』、一四九頁)。恐らく、柏木の過去の読書時の記憶が時の経過のなかで混乱していたものと想像される。

(52) 「個人伝道」『月報』四二三号、一九三四年二月(二一・一八一—一九)。「福沢先生」同四四九号、一九三六年三月(二一・三八六)。柏木は「吾人の眼に映じたる新島襄先生」や「個人伝道」では、福沢への批判にあたって「戸毎に説き人毎に諭す」と書いているが、『文明論之概略』の原文に即するなら「每人に説き毎戸に諭す」と記すべきところである。なお、柏木は「福沢先生」では「人毎に説き戸毎に諭す」とより正確に書いている。

(53) 「人毎に説き戸毎に諭す」伝道は、柏木にとっての理想像であり、湯浅茂世(湯浅治郎の母)もそのような伝道者であった。片野真佐子『柏木義円』、二二一頁。

(54) 「青年と煩悶」『月報』九四号、一九〇六年八月(三・二三〇—二三四)。

(55) 片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』、二四九—二五〇頁。

(56) 「新島先生と福沢先生」『月報』一三五号、一九一〇年一月(四・一五一)。

(57) 「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」(前掲注(49))。

(58) 「新島襄先生伝に就いて」『月報』三七七号、一九三〇年四月(九・四〇九—四一三)。「新島襄先生を憶ふ」(前掲

注(45))。片野真佐子『柏木義円』、一八七頁。

(59) 柏木は講話で福沢と新島に関する話題を取り上げ、これらが『月報』記事になっていたものと思われる。一九三五年の日記(七月二〇日)に、青年会で話が通じにくいと感じたのか、「福沢、新島両先生ノ事ヲ話ス、多クノ人ニハ分ラサリシナラン、将来注意スベシ」と記している。『柏木義円史料集』、三二三、四三八頁。

(60) 柏木は教会の日曜学校でこの一句を児童に暗誦させている。真下武雄「教会学校の思い出」『播かれし種は生え育て——創立百年記念文集』安中教会、一九八五年、四四頁。

- (61) 「人道に関する一問題」『月報』一四八号、一九二一年二月(四・三〇六―三〇七)。
- (62) 「デモクラシーの本領」『月報』三六七号、一九二九年六月(九・二六六―二六七)。「自由教育、自治教会」同四一九号、一九三三年九月(一〇・五〇三―五〇四)。「明治維新の二大魂魄」同四二三号、一九三三年二月(一〇・五〇―五五一)。「使徒保羅の人生觀」同四三三号、一九三四年一〇月(一一・一三九―一四一)。「武士道と十字架道」同四三八号、一九三五年四月(一二・二二二―二二三)。「武士道と十字架道」は、「皇室ノ絶対的尊嚴ヲ否認スルガ如キ筆致アルニ因リ」發禁処分を受けている。『出版警察報』八〇号、一九三五年、三一頁。
- (63) 岩谷十郎「楠公権助論」『福沢論吉事典』慶應義塾、二〇一〇年、一一九―一二〇頁。
- (64) 小股憲明「明治四五年六月 組合教会関東部会講演会における平田義道の楠公論事件」『明治期における不敬事件の研究』思文閣出版、二〇一〇年、五五四―五五五頁。組合教会の牧師平田義道は、新潟県師範学校での講演の際、幼少期に楠木正成の「七生報国」の誓いに感心していたが、後に聖書を通して愛敵の精神を知り、キリスト教の優れた点を知ったと話し、この発言が師範学校長から咎められ、新聞からも批判された。
- (65) 「新潟に於ける楠公事件」『月報』一六五号、一九二二年七月(四・五一―五一三)。
- (66) 「明治の二天教育家」『月報』三三四号、一九二五年九月(八・三八九―三九〇)。
- (67) 柏木の日記(一九一九年二月六日)に『福翁自伝』読書の記述がある。『柏木義田日記補遺』、一八〇頁。
- (68) 「戦争に対する吾人の態度」『月報』六五号、一九〇四年三月(二・五四二―五四四)。
- (69) 「武士道と基督教」『月報』三六八号、一九二九年七月(九・二七九―二八二)。
- (70) 柏木は、ホノルル留学中の長男隼雄に宛てた書簡(一九一三年四月二四日付)で、「急進」的進歩主義者たる福沢を見習うよう論じている。『柏木義田書簡集』、六三―六四頁。「日本ハ武士風ノ勇者ヲ要セズ、福沢先生ノ如キ世潮ニ頓着ナク所信ニ猛進スル大勇者ヲ要シ候。勇猛ナル急進者ヲ要シ候。回顧的ノ勇者ハ要セズ、乃木將軍ノ如キ人格ハ尊敬スルモ其ノ保守的ナルハ取ラズ、ハイカラナリ事勿レ、蛮カラ可ナリ而カモ必ズ進歩主義タレ」。

- (71) 片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』、一二四―一二五頁。
- (72) 『福沢諭吉集（新日本古典文学大系 明治編一〇）』岩波書店、二〇一一年、二二〇―二二二頁。
- (73) 「加藤博士の「吾国体と基督教」を読む」『月報』一〇八号、一九〇七年一〇月（三・四〇四―四〇五）。
- (74) 「明治の二大教育家」（前掲注（66））。
- (75) 『福沢諭吉集』、二二―二四頁。
- (76) 「福沢先生と偶像」『月報』二五八号、一九二〇年五月（六・五〇五―五〇六）。「政府の神社政策」同三三三号、一九二六年八月（八・三七八―三七九）。「福沢先生と偶像」同四三〇号、一九三四年八月（一一・一一七―一一八）。
- 「偶像と教育」同四三九号、一九三五年五月（一二・二四一）。
- (77) 「偶像と教育」（前掲注（76））。
- (78) 「『偶像と教育』と題する記事は、各学校等に御貸下の御真影を（中略）偶像視し更に「それが為に火災その他の事故に依りて既に幾多の人々がその生命を棄てている」としてその御保存を厄介視し、又は無視するが如き不敬の言辞を弄するに因り禁止処分に附せられた。』『出版警察報』八一号、一九三五年六月、八一―九、三一頁。片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』、三三―三四頁。
- (79) 「時局がいよいよ切迫するにつれて『福翁自伝』について心配する人が現れた。文藝春秋を主宰していた菊池寛が、敬神崇祖の気風がやかましく唱えられている折柄、『福翁自伝』の中で、神棚のお札を便所に落したり、稲荷の神体を調べて他の石と取り換えたりする話は、あれは極端主義者につけ込まれるおそれがあるから、今のうちに手配して削除しておかないと危ない」と心配し、編集者の佐佐木茂索に、君から慶應義塾の人に注意しておくように言ったと言う。」富田正文「執筆此談」『考証福沢諭吉』下、岩波書店、一九九二年、七八七頁。
- (80) 小泉仰「福沢諭吉と仏教」『福沢諭吉の宗教観』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年、二三九頁。
- (81) 「宗教は衣食の如し」『時事新報』一九〇二年一月二十四日（石河幹明筆）。石河幹明執筆の『時事新報』社説に関

しては、下記の目録を参照。『石河幹明論説目録について——主幹就任後（明治三二年八月—大正九年十二月）』慶應義塾福沢研究センター、一九九二年。

(82) 福沢一太郎は、日原昌造宛書簡（一八九九年十二月三日付）で、父諭吉の仏教最良に不満を漏らしている。「日原昌造関係文書」『福沢論吉全集』二二巻、岩波書店、一九七一年、三五〇—三五一頁。

(83) 石河幹明の娘は、聖公会系の香蘭女学校に通い、後に聖公会の信者になっている。石河は同校の評議員を務めている。

(84) 小川原正道「日露戦争——列強との対決と「団結」」『近代日本の戦争と宗教』講談社、二〇一〇年、一七八頁。

(85) 「基督教青年会への恩賜」『時事新報』一九〇五年五月七日。

(86) 「御下賜金と世論——時事新報」『月報』八〇号、一九〇五年六月（三・六六）。この一文では、『時事新報』のほか、仏教系の『教界時事』、キリスト教系の『護教』、『福音新報』の記事が引用されている。

(87) 小野雅章『教育勅語と御真影——近代天皇制と教育』講談社（講談社現代新書、二〇一三年、六七—六九頁）。

(88) 岩本努「栃内泰吉の御真影殉職とその後——三陸大海嘯と御真影」『御真影』に殉じた教師たち』大月書店、一九八九年、二七—三三頁。

(89) 石河幹明「今日の修身処世法を如何す可きや」『明治文学全集』九一卷、筑摩書房、一九九一年、一一九—一二〇頁。

(90) 「御真影と学校」『時事新報』一九〇二年一〇月一七日。「御真影に関する出来事に就て」同一九〇三年三月二九日（以下、石河幹明筆）。「学校の御真影」同一九〇八年三月二二日。「学校の失火」同一九二二年三月七日。

(91) 『時事新報』では、洪水災害の際、滋賀県の小学校の訓導が死の危険を冒して御真影を守りぬいたことが報じられている。「訓導死を冒して御真影を護る」『時事新報』一八九五年八月六日。

(92) 「教育時弊」『月報』五八号、一九〇三年八月（二・四六四—四六七）。

(93) 『尊王本論』『月報』三六二号、一九二九年一月(九・一八〇—一八三)。「今年に入っても亦」同三八〇号、一九三〇年七月(九・四五三)。

(94) 大逆事件関連の石河社説に関しては、昆野和七「解説」(『石河幹明論説目録について』)が概要をまとめている。石河は『続福沢全集』五卷(一九三四年、岩波書店)に大逆事件に関する自身の社説を収めたが、この再録は彼の「懐旧の念」よりもむしろ同時代への危機感から行われたものと考えられる。福沢精神を継承しながら時代の反動化に抗した点において柏木と石河は同時代の共闘者であった。

(95) 「勅語の捧読講演は式の如く行はる、も動もすれば形式に流れ日常の居家処世訓として其旨を実行するには或は行届かざる所なきや如何、又彼の御真影を学校に安置するが如き之を拝して敬愛の念を増さしむるの趣意なる可しと雖も其御真影の為に或は不敬事件を生じ或は失火の場合に之を取出さんとして死傷し甚だしきは力及ばずして焼失せしめたるために非難攻撃を蒙り自殺したるものさへ出したるなど忠愛の本旨は実際に徹底せずして尚ほ極端苛烈なる氣風の行はるゝを見る。此際に当局者が熱心一遍、飽くまでも忠愛の精神を鼓舞奨励す可しとて大に盡力することもあるらんか、儒教復活の例の如く其目的は達せずして却て其余弊を見るに至る可きのみ」。石河幹明「極端苛烈の氣風」『明治文学全集』九一卷、一三七—一三八頁。

(96) 片野真佐子『柏木義円』、一〇二—一〇三頁。

(97) 「鎌田文相に望む英断ニツ」『月報』二九〇号、一九二三年一月(七・三四七)。

(98) 柏木は、鎌田栄吉が日露戦争後の日本人の虚栄心を批判した「戦後教育所感」(『慶應義塾学報』一〇六号、一九〇六年)を賞賛している。「戦勝国の国自慢」『月報』九五号、一九〇六年九月(三・二四四—二四五)。

(99) 大濱徹也「乃木の死が投じた波紋」『乃木希典』講談社(講談社学術文庫)、二〇一〇年。

(100) 石河幹明「乃木大将の自殺」『明治文学全集』九一卷、一四三—一四四頁。

(101) なお石河はこれ以前から「武士道」に批判的な社説を発表している。「自殺と武士道」『時事新報』一九〇九年七月

一六日。

- (102) 板倉卓造「石河幹明氏のこと」『三田評論集』慶應義塾、一九六二年、七九—八〇頁。
- (103) 「乃木大将と自殺」『月報』一六八号、一九二二年一〇月（四・五四八—五五一）。
- (104) 「福沢先生の余香」『月報』一六八号、一九二二年一〇月（四・五五四）。
- (105) 「香川県教育会の失態」『月報』一七〇号、一九二二年二月（四・五七五）。
- (106) 石河幹明『福沢諭吉伝』一卷、岩波書店、一九三二年、五八〇頁。「大正四年十一月大正天皇が御即位の大典を京都に於て挙げさせられ給ふとき、国家に功勞ある者の爵位勲等を陞せられ又は新に授けらるゝと同時に故人に對しても贈位のことがあつた。丁度その事の發表せられんとする間際に、先生へも贈位の御沙汰があるといふことが図らずも著者の耳に入つた。著者は大に驚き、先生々前の素志より推して身後と雖も位階などは受くべきものでないと信じ、其時塾長鎌田栄吉が貴族院議員として御大典に參列すべく京都に出張中であつたから、至急電話を以て先生へ贈位の事實をたしかめ、若し事實ならば未然に沙汰止みになるやう尽力せんことを協議した。時に塾員犬養毅も衆議院議員として式に列するため同じく京都に在つたので鎌田と共に尽力し、時の内閣に列してゐた尾崎行雄（司法大臣）、箕浦勝人（逓信大臣）兩人を通じて大隈首相に其實否を質したところ、どうしたわけか先生の平生をよく理解してゐるべき筈の首相は、先生をも贈位者の中に加へて奏請に及び、明日にも發表するばかりの運びになつてゐるとのこと、在朝の兩人も贈位は先生の素志に背く所以であることを力説したため、發表せられずに済んだ事實があつた。」
- (107) 小川原正道「官」の評価『福沢諭吉——「官」との闘い』、一三六—一五三頁。
- (108) 「浪士の贈位」『時事新報』一九〇二年一月一八日。「志士の贈位」同一九一一年六月三日（ともに石河幹明筆）。
- (109) 「洪庵先生贈位祭」『時事新報』一九〇九年七月一〇日（石河幹明筆）。
- (110) 「東人西人」『東京朝日新聞』一九一五年一月一四日。
- (111) 雪嶺迂人「序文」河野正義編『贈位功臣言行録』国民書院、一九一六年、三—四頁。「贈位は唯一の標準ならず、

他にも幾種標準の存在し、且つ贈位を好まずして之を拝辞する福沢一家の如きあり」。

- (12) 土肥昭夫「近代日本における天皇即位とキリスト教」「天皇とキリスト——近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察」新教出版社、二〇一二年、二八一頁。

- (13) 「思ひ掛けなく新島襄先生は、此の御大典に際して、従四位を贈られ給へり。自ら「洛陽之二平民」と署したる先生に取りては、寧ろ意外の感あらんも、先生の国家に貢献したる功労が、聖天子の認め給うたる証徴として見れば、予は聖恩の忝なきに感激せざるを得ず。況んや先生の同列には、伊藤東涯、古賀精里、尾藤二州、佐藤一斎、安井息軒の如き諸賢あるをや。是れ決して先生を辱しめざる也。」徳富猪一郎「南禅寺より若王子」「烟霞勝遊記」下巻、民友社、一九二四年、二四〇頁。

- (14) 蘇峰は、大隈重信宛の書簡（一九一五年二月五日付）で次のように書いている。「御承知の如く本年は亡師新島二十五年期にて、同人生前教育之功勲に對し是非九重の御恩典に預り度、既に同人生前に於ても閣下御庇蔭によりて大寄附金の端緒を得候次第、何卒同人死後の恩典も閣下の御高配を奉煩度、即是生前死后始終一貫悉皆閣下を煩奉候儀是亦宿縁と御諦被成下度呉々も奉懇願候。」早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』八、みずず書房、二〇一二年、四二頁。戦後、蘇峰は、大隈重信が新島の贈位に示した配慮に関して感謝の念を述べている。徳富蘇峰（聞き手 渡辺幾治郎）「書翰を展べて大隈侯を語る」「大隈研究」三輯、一九五三年、一五一頁（『社会科学討究』（四一卷三三号、一九九六年）に再録）。

- (15) 「創立四十年記念会」「同志社時報」一二六号、一九一五年二月、二頁。当時の同志社社長は原田助であつたが、『月報』には新島贈位に関して原田が「故人の志を辱めた」（「前号開書の反響」『月報』二三八号、一九一八年九月）との批判が掲載されている（六・二五三—二五四）。

- (16) 「（一九一五年一月一日）過日の新聞に、福沢サンも従三位を賜らるゝ、内意があつたのを、福沢家から在京都の鎌田栄吉に打電し、箕浦、武富から大隈翁を経て拝辞したとあつた。新嶋さんの従四位を思ふと、同志社無人が恥か

しくなる。位階勲等などは所謂「辞するに足らぬ」ものかも知れぬ。然し「洛陽の一平民」と名のつた新嶋サンの贈従四位は、一種の *hony* だ。同志社は死んだ。而して之を殺した者は蘇峰だ。『蘆花日記』二巻、筑摩書房、一九八五年、一五一—一五二頁。

(117) 「聞く処に由れば、福沢先生にも亦贈位の恩典あるべき筈であつたが、事故人の遺族に洩れて終生無位無官無爵の一平民たるを一貫した故人の志に悖るを恐れ、発表に先立ちて固く拝辞したさうである。布衣宰相を以て任ずる学者の中には俗人の位階を以て墓石を飾るを欲せざる恰も福沢先生と志を同ふするものは決して一人や二人に非ざるならん。少くも新島先生の如きも亦拝辞する事が出来なかつたを遺憾とするならん。『内田魯庵全集』七巻、ゆまに書房、一九八六年、三七四頁〔輝きある年の暮〕『太陽』二二巻、五号、一九一五年二月〕。

(118) 柏木は、一九一五年一月一日、安中教会の懇話会で新島贈位に触れ、もし新島が存命ならば「階級的なる叙位」を受け入れたはずがなかつたと語り、福沢の贈位辞退に関しては「福沢先生の平民主義は後進に徹底」していると賞賛している。「教報欄」『月報』二〇五号、一九一五年二月（五・四三二—四三三）。

(119) 「人爵有り難がり」『月報』三七一号、一九二九年一月（九・三三三）。「新島先生と福沢先生」同四四七号、一九三六年一月（一一・三五六）。「人」同四五三号、一九三六年七月（一一・四四二）。「人てふ名」同四五六号、一九三六年一〇月（一一・四八五）。

(120) 「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」（前掲注（49））。

(121) 柏木は、一九三二年九月の書簡で『福沢諭吉伝』を新島襄伝作成の参考にしたいと語っている。「一九三二年九月二日付柏木寛吾宛柏木義円書簡」『柏木義円史料集』、一二五頁。なお『月報』では、「国家至上主義と神の国」（『月報』四二八号、一九三四年六月）も『福沢諭吉伝』を参照して書かれている（一一・七二—七三）。

(122) 前掲注（106）。

(123) 「新島襄先生伝に就いて」（前掲注（58））。

- (124) 「時代後れの亜細亜モンロー主義」『月報』二三二号、一九一七年五月（六・五三―五四）。
- (125) 徳富蘇峰「日本精神と新島精神」『日本精神と新島精神』関谷書店、一九三六年、三六―三七頁。
- (126) 「蘇峰氏曰く」『月報』四四九号、一九三六年三月（一一・三五八）。太田雅夫「柏木義円の未完」『新島襄伝』——日記に見る執念と苦悩』『新島襄とその周辺』青山社、二〇〇七年、三一七頁。
- (127) 伊藤彌彦は、蘇峰と柏木を対比して、蘇峰を「新島修正主義者」、柏木を「新島原理主義者」と呼んでいる。伊藤彌彦「新島襄と蘇峰」杉原志啓・富岡幸一郎編『稀代のジャーナリスト・徳富蘇峰 一八六三―一九五七』藤原書店、二〇一三年、一四〇頁。
- (128) 小川原正道『福沢諭吉 変貌する肖像』、一四七―一四九頁。
- (129) 「福沢諭吉君と新島襄君」『明治人の観た福沢諭吉』、九―一四頁。小川原正道、前掲書、三八頁。
- (130) 柏木は、当時の「日本精神」流行の背景に「国民進取の理想」の枯渇を見て取っている。「古往今来」『月報』一九三四年一〇月（一一・一四六）。
- (131) 『新生命』は一九三七年一月から月刊で発行され、四一年四月まで刊行（同年六月に『群馬教壇』に改題）された。笠原芳光「新生命」『日本キリスト教歴史大事典』、七〇二頁。
- (132) 『新生命』編集に携わった菅井吉郎（高崎教会牧師）は、後年、当時の柏木の悄然とした姿を回想している。菅井吉郎『柏木義円伝』春秋社、一九七二年、四一―四三頁。
- (133) 伊谷隆一「戦時下上毛のキリスト者たち——『新生命』『群馬教壇』の思想」『回帰と憂憤のはて』国文社、一九七一年。
- (134) 「支那事変ニ関スル声明」『新生命』四七二号、一九三七年一月（同志社大学人文科学研究所蔵）。柏木は日記（一九三七年九月一〇日）に「支那事件憂フ可シ、軍部ノ野心ニ引キ摺ラル、日本！近衛首相何人ゾ、唯日本ヲ所謂巨大ニシタイト云フノミ」と書いている。『柏木義円日記』、五二二頁。

- (135) 海老沢宣道「クリスマスの悲哀」『新生命』四七三号、一九三七年一二月。
- (136) 柏木の『新生命』寄稿文が「身辺雑事と回想」にとどまらないことに関しては、片野真佐子の示唆がある。「解説」『柏木義田史料集』、四三三頁。
- (137) 隠退老実業家「今日の日本社会観」『新生命』四六七号、一九三七年七月。この書簡には、日本の友好国は独伊やソ連ではなく、英米のような社会組織の安定した国であるべきであり、近年の日本国内に「ファッショ的の暴行」が見られるのは痛嘆に堪えないと書かれている。
- (138) 柏木義田「工学博士下村孝太郎先生御逝去」『新生命』四七三号、一九三七年一二月。柏木は、下村孝太郎（同志社第六代社長）が盧溝橋事件の際も非戦論に立っていたと記し、柏木自身は「政治学及び史学上の立場に在るを以て全然非戦論と申す訳に参り不申^{もつと}」と書いている。
- (139) 「時事新報の廃刊」『新生命』四六〇号、一九三七年一月。柏木は、日記（一九三六年十二月二五日）に「時事新報廃刊、明治十五年三月ヨリ五十五年」と感慨を記している。『柏木義田史料集』、三七六頁。